

箕面こどもの森学園

ESD の実践と国際交流



はじめに～箕面こどもの森学園とESDについて～

◇2017 年度 箕面こどもの森学園 ESD の実践

- ・ 1 学期 気候変動～ちーきゅんを救え～
- ・ 2 学期 平和のレシピ
- ・ 3 学期 わたしの将来



コラム① SDGs カードゲーム

◇ESD 国際会議／海外視察報告

- ・ 平和と持続可能性のためのユネスコウィーク
～カナダ・オタワでの国際会議
- ・ 中国の教育を体感～個性的な教員の方々と～
- ・ 韓国のユネスコスクール～地球市民教育～
- ・ SDGs に向かうために、ESD が大きな役割を果たす！
～北京でのアジア太平洋専門会議～



コラム② 韓国の ESD 実践者との交流！

◇箕面こどもの森学園の取り組みについて

- ・ 伊井 直比呂さん(大阪府立大学)
- ・ 永田 佳之さん(聖心女子大学)

コラム③ ユネスコ気候変動プロジェクト～ビデオ会議

◇これまでの学習テーマ(3 カ年)



はじめに

ESD（持続可能な開発のための教育）は、
一般に環境問題や人権や平和のことを学習する教育と考えられていますが、
実はそれだけではなくて、将来も人類が地球上に持続的に暮らしていくために
必要な行動を促す SDGs（持続可能な開発目標）の基盤となる教育です。

これからは、ESD が私たちの生活のリテラシーとなるでしょう。

この冊子は、私たちの学校の ESD の取り組みを紹介したものです。

小さな歩みにすぎませんが、これからそれを大きく育てていきたいと思っています。

読んでくださった方が、この冊子をヒントにして、
学校やご家庭でできることに取り組んでいただければうれしいです。

箕面こどもの森学園と ESD について

今から 17 年前、私たちが市民の手で学校を創ろうと思ったときに、こんな教育をしたいということを学校設立趣意書に書きました。その中で、次のように述べています。

「今日の暮らしの中では衣・食・住に関するものはお金を出せば何でも手にはいるため、私たちは自らモノを作るという経験はほとんどありません。この学校では、花や農作物を栽培したり、動物を飼育するという体験を持つことが奨励されます。それは自然の営みや生命の尊さを学んでほしいと思うからです。また料理、手芸、工作、食品加工などを自らの手で行うことによって、日常生活に必要な技術を身につけるとともに、自然環境に対して負荷をかけることの少ないエコロジカルな暮らし方を学んでいきます。」

私たちは、このような考えに基づいて教育を行ってきましたが、その中で重視してきたものの一つに『テーマ学習』があります。テーマ学習というのは、環境・人権・平和・市民性といった分野の中から、その時々により適当と思われるテーマを選び、1 学期間かけて学ぶ総合的な学習です。そのやり方は、生徒たちがいくつかのグループに分かれて、それぞれが小テーマを考え、それについて多様なやり方で学びます。たとえば、本やインターネットで検索して調べたり、

そのことに詳しい方に学校に来てもらってお話を聞いたり、博物館や施設を訪れたりします。そうやって調べた結果を、図で表したり、小冊子にまとめたり、あるいは演劇で表したりします。そして、最後には学習発表会を開いて、保護者や地域の方々にも聞きに来てもらいます。



そのような教育実践を続けていたのですが、あるとき、ユネスコスクールという世界的な学校のネットワークがあることを耳にしました。そこで、実践されている ESD（持続可能な開発のための教育）のコンセプトや内容は、私たちがやっているテーマ学習や、プロジェクト学習（子どもの主体的で体験的な学習）と相通じるものだったのです。私たちの学校がユネスコスクールに認めてもらえるかどうかわかりませんが、すでに NPO 法人学校が認められていたので、申請することにしました。

ユネスコスクールの申請をするには、まず日本の文部科学省内にあるユネスコ国内委員会に申請書を送って、その審査に合格して、パリにあるユネスコ本部で認定されなければなりません。ユネスコ国内委員会に「申請書を出したいのですが」と尋ねたところ、申請する学校が多くて、そのための基準を作成中なので、しばらく待ってほしいとの言われました。1年以上が過ぎた頃にやっと返事が来て、申請書を送ってもいいとのことでした。そこで、急遽、日本語と英語で申請書を作成し、それを国内委員会に提出しました。それからまた1年ほど経った2015年1月に、ユネスコスクールに認証されたという知らせが届きました。こうしてNPO法人としては4校目のユネスコスクールになることができました。

2016年には、私たちの学校がESDを積極的に行っている学校として、全国で24校しかない文部科学省の委託事業のサステナブルスクールの1校に選ばれました。2017年と2018年には、私たちの学校のスタッフが、カナダで行われたユネスコ国際フォーラムの日本代表に選ばれたり、韓国政府や中国政府の招聘による日本教職員訪問プログラムに参加したり、ESDに関するアジア太平洋専門家会議に参加したりしました。そして、2018年3月には、「気候変動」をテーマにした国際的なWEB会議を、

私たちの学校とデンマークとレバノンの学校との間で行いました。

2015年の国連サミットでSDGsが採択されたことがきっかけとなり、世界中がその実現に向けて大きく動き出しました。持続可能な社会とは何なのか、そのために私たち一人ひとりはどうあればいいのかが、今問われています。ESDを実践していくことは、自然や多様な文化を尊重し、現在および未来に生きるものを大切にするライフスタイルを養うことになります。

ESDの実践にこの冊子を役立てていただき、世界が少しでもSDGsに近づいていくことを心から願っています。

箕面こどもの森学園 学園長/辻 正矩



2017年度 箕面こどもの森学園 ESD の実践

- ・ 1学期 気候変動～ちーきゅんを救え～
- ・ 2学期 平和のレシピ
- ・ 3学期 わたしの将来

1 学期テーマ「気候変動～地球とわたし～」

2017 年度、世界中のユネスコスクールの子どもたちが同時期に、

「気候変動」について学ぶ取り組みがなされました。

こどもの森もその1校として、この重要なテーマについて学びを深めていきました。

地球レスキューだいけんきゅう！

～低学年の学び～

低学年では「地球レスキューだいけんきゅう」と題し、地球温暖化について知ったうえで、自分たちが地球だったらどんな気持ちだろう？と、大きなビニール袋に入って温度の変化を体感してみたり、温暖化を止めるために自分たちの身の丈でできること（電気を大切に使う、ごみを少なくするなど）を出し合い、校内の要所要所に「もったいないシール」を貼って啓発活動をしました。さらに、「ウータン・森と生活を考える会」のみなさんに講師として来ていただき、ボルネオ島の森林保護とオランウータンの保護活動のお話をさせていただきました。また、布製の地球儀（地球型トーキングバトン）を学習室に置いたところ、子どもたちは親しみを込めて地球のことを「ちーきゅん」と呼ぶようになりました。学びのまとめとして、こんな地球だったらいいなという願いをこめた地球上のいろんな地域を描いた大きな絵の制作と、「ちーきゅんを救え！エコパワー大作戦」というお芝居を作り、発表会で披露しました。

それぞれの観点で調べた気候変動

～高学年の学び～

高学年は、地球の環境問題に第一線で取り組んでおられる方々を講師に招き、今の地球環境の現実をしっかりと見ることから始めました。みのおアジェンダ21のみなさんに、CO2 を計測する器械や人力発電を使ってワークショップをしていただいたり、「ウータン・森と生活を考える会」のみなさんから、パーム油生産のために森林破壊が行われていること、パーム油はスナック菓子や洗剤などわたしたちの生活用品に使われていることなどを教えて頂きました。また、国連気候変動会議（COP）に日本から参加されている地球環境市民会議 CASA の



方にも来ていただき、リアルタイムの地球環境の現状についてお話いただきました。その後、子どもたちは自分の関心のあるテーマについて調べ、発表しました。サンゴの白化、天気、二酸化炭素の排出、家庭でできる温暖化対策、動物の危機、植物への影響、絶滅危惧種、ペンギンの危機という観点からの調べ学習の発表のほか、気候変動による動物への影響をオリジナルの台本でペープサートで発表した人や、マンガ本を制作して地球温暖化について説明した人もいました。学びのクライマックスは全校生徒による「地球レスキューこどもの森会議」。事前に集めておいた意見をもとに、地球のために自分たちができることを話し合い、実行していくことになりました。

(守安あゆみ)



気候変動 ～中学部の学び～

中学部では「地球が壊れる前に」という映像を鑑賞し、疑問やキーワードを出すことから始めました。そうして高学年とともに環境分野に詳しいゲストのお話やワークショップを通して、気候変動への理解を深めていきました。地球市民会議（CASA）の方からは、国連気候変動会議（COP）の様子や、パリ協定について教えていただきました。そんな折に、アメリカがパリ協定離脱を表明。このニュースについて考える時間を持ちました。子どもたちの中でも複雑な思いの様子でしたが、アメリカ国内でも”We are still in”とパリ協定を支持する動きがあることを知ると「ホッとした」という声もありました。

その後は、一人ひとりが関心のある個人テーマを研究していきました。自然環境の変化や影響に注目した「降雪量との関係」「災害への影響」「サンゴの白化」、地球温暖化そのものについて考えた「地球温暖化は本当に起こっているの?」「温暖化と寒冷化」、その他にも「地球温暖化と医療保険の関係」「ヒートアイランド現象」「地球温暖化で得する人はだれ?」などに取り組み、仮説や疑問に基づいてアンケートをとることや、詳しい団体に問い合わせ調べ発表しました。子どもたちからは「自分たちの生活と関連があることを知って驚いた」「まず知って自分から行動する」などの感想がありました。地球規模の課題を自分たちのつながりを感じながら、少しずつ子どもたちの目線でひも解いていくような学習になりました。

(高原麗奈)

2学期「平和のレシピ」

オリエンテーションで、スタッフが演じる寸劇「平和ってなに？」を観た後、みんなで「平和」について思うこと、意見や疑問を出し合いました。そして、立命館国際平和ミュージアムを見学し、戦時中の悲惨な体験を聞いたり、戦争にまつわる展示物を見ることで、平和でない暮らしを考える機会となりました。

平和のレシピと3色の帽子 ～低学年の学び～

低学年クラスでは最初に、映画「うしろの正面だあれ」を鑑賞し、絵本「もっとおおきなたいほうを」を読み、途中からの展開を想像するワークショップを行いました。そして、みんなで「自分の平和」「自分と家族の平和」「自分と友だちの平和」を考え、一人ひとりが絵と文章で「平和のレシピ」を作りました。次に、ピースフルプログラムより、他者と対立が起こった時の解決方法をワークショップで学び、「サルトラ劇場 ～3色の帽子～」という劇にして発表しました。「暴言・暴力」の赤い帽子、「我慢」の青い帽子、「対話」の黄色の帽子をかぶってサルとトラを演じ、「じゃあ、どうする？」と、話し合いを通して平和的に解決する方法を示しました。

後日、校内で喧嘩が起きた時に「〇〇ちゃんが赤い帽子をかぶってる！」という声を聞き、3色の帽子がこどもたちの意識に芽生えている事がわかり、嬉しい驚きでした。「じゃあ、どうする？」と対話をはじめ、一人一人が対立を解決できる人になってほしいと思います。



平和のレシピ～ささやかな提案 ～高学年・中学部の学び～

高学年クラスは、「平和とは何だろう」、「戦争のない世界が平和だといえるのだろうか」など、高学年・中学部の縦割りグループで、意見や疑問を出し合いました。また、太平洋戦争を小学生の頃に経験した方に来校いただき、当時の情勢や厳しい生活を伺いました。それにより世界に広く関心を向ける事や、一度自分で考えてみる事の大切さに改めて気づきました。

子どもたちは「平和の民族」「壁」「堀越二郎」「太平洋戦争」「動物と平和」「アタトゥルク」「ノーベル平和賞をとった人たち」「協力」「みんなの考える平和」「大久野島のこと」「心の平和」など、それぞれの興味や関心から、個人やグループで調べ発表しました。自分、友達、家族という身近な存在が平和であるとはどういう事か考えました。また、世界で起こった悲慘な戦争を知り、どのように平和をつくっていったか、平和な社会であるために何が必要かを問いました。

今回のテーマは、平和をつくるために自分にできることは何か、を深く考える学習になりました。振り返りでは、それぞれが絵や文章で「平和」を表わし、現在「平和のレシピ」として冊子にまとめる準備をしています。子どもたちが平和を願うだけではなく、創っていける人になることを願っています。

(芳仲磨由美)



中学部では「平和ってどんな状態？」そんな問いからオリエンテーションが始まりました。立命館大学国際平和ミュージアムを訪れ、過去や現代の戦争について展示を見学しました。また名誉館長のお話から、争いがない状態が平和ではなく、貧困やいじめなど社会の仕組みにも平和を阻む要素があることを知りました。また少年時代に戦争を体験された楠山雅彦さんのお話し、「世界の戦火の歴史」についての映像鑑賞、平和の年表作りを通し、平和や対立について考えていきました。その後、自分のテーマを選び、疑問や仮説にそって調べ発表しました。テーマには、『子どもたちの平和のために学校はどうあればいいのか』『子どもにとって幸せ、平和な教育ってどんなこと?』『自衛隊は要るか』『なぜ争いは起こるのか』『世界の識字率と日本の貧困』『身近なところで起こる小さな争い』『ペットの平和』『平和と正義と悪』『アートは平和に影響を与えることはできるのか?』など、さまざまなテーマがありました。

平和とは?「安心して学校に行けること」「動物も安心して生きられる状態」そして、子どもたちが考えた“平和をつくるためにできること”は、「多角的に考えること」「(自分の好きな)絵を使って、世界がポジティブで楽しく平和になるようなメッセージを伝えたい」。『平和のレシピ』という答えのない問いを探究しながら学び、感じた言葉を伝えました。(佐野純)

3学期「わたしの将来」

自分ってどんな人？何が得意（好き）？どうやって生きていく？ということを考えるきっかけになれば、また、そうして考えることで人生への希望や前向きな気持ちを持てるきっかけになればと思い、このテーマに取り組みました。また、深く広い視点で、自分とはどういう人か、働くとはどういうことか、社会と自分との関係は、などについて考えていきました。

わたしの将来をイメージする

低学年では、自分自身を知るところから始め、身近な大人の生き方に触れ、自分の将来のイメージをしてみる、ということをやってみました。

まず自分自身を知るという段階では、すきすきマップ（マインドマップのように、自分の「好き」についてキーワードを出す）を書いたり、友だちのいいところを伝え合ったりしました。さらに、生き方に関して保護者の方にインタビュー形式で答えてもらい、それを小グループでシェアすることにより、子どもたちは、「こんなお仕事があるんだな」「そういうことを考えて働いているんだな」ということを感じ取っていました。そうした学びのまとめとして、では自分は将来どういう風に生きているだろう？と考えたことを絵で表現しました。好きなことをしている、のんびりと過ごしている、どこどこで暮らしている…など、あるひとつの職業に就く、ということに留まらず、子どもたちはそれぞれに自分らしく生きる姿をイメージしていました。



働くってなに？どういう風に生きていこう？

低学年と同様、まずは自分を知るところから高学年もスタートしました。お互いのいいなと思うところ、自分にはないなと思うところ、こういうことをしてもらって助かった（嬉しかった）というようなことを記入し、伝え合いました。また、「仕事」や「働く」ということについて、外部の方に来ていただいて、学園にてお話を伺ったり、分科会のような形で子どもたちの質問に答えていただいたり、会社見学へ行かせていただいたりもしました。そのような学びを経て、では自分は何を大切にしようという風に生きていこうか、ということにそれぞれが向き合い、発表へ向けて準備をしていきました。好きなことをしている将来の自分の姿を描いた人、自分の生きていきたい将来に向けて、今の自分に足りないところを見つめられた人、「これが好き！」という自分の強い気持ちに気が付いた人、自分の好きなことを続けていくと地球の平和につながるということに気が付いた人、など、子どもたちそれぞれの学びを、プレゼンテーションや絵本、模造紙などに表現して発表しました。

（福田 麻衣）



中学部では、「私のいいところ」として、お互いのいいところを伝え合い、また将来自分の得意を活かして仕事するなら？と「衣・食・住」の会社を企業するワークショップをしました。「私を語る8つの箱」では、自分と他の人から見た自分を言葉にしていくこと、「自分の夢や好きを深めよう」では、好きなことの理由をあらためて考え深めるワークをしました。そうして、いろんな生き方や働き方をしている方に出会い、少しずつ将来の姿をイメージしていきました。コンサルティング事業をされている会社・パワーブランディングの社員のみなさんから、活動への想いやきっかけについて直接お話を聞きました。小型充填機を製造されている会社・ナオミを訪れ、製造過程や社内のいろんなお仕事を見学しました。代表の駒井さんのお話からは、働く上で大切にしている想いをお聞きしました。「私が見つけたライフストーリー」では心惹かれる人のことを調べ、自分とのつながりを考えてみることにしました。

その後は、一人ひとりが自分のこと、生きる上で大切にしたいこと、自分らしい将来について考えていきました。学習発表会では自分と向き合うなかで、新たに発見したことやさらに想いが深まったことなど、中学生の一人ひとりが、それぞれの言葉で描いた将来の姿を表現する時間になりました。

（高原麗奈）



コラムⅠ

SDGs カードゲーム

持続可能な社会の担い手になる
～SDGs ゲームの結果～

認定 NPO 法人箕面こどもの森学園では、2017 年度に Manabee プログラムという一般の方々を対象にした講座を開講しました。これは、こどもの森の実践のポイントを詳しく伝え、同じような取り組みができる方を増やそうというプログラムです。講座の最後には、『共育プログラム』ということで、講座を通して学んだことを活かした学習をグループで考え、それを実際にこどもの森に通う子どもたちを対象に実施していただきました。

あるグループが『SDGs カードゲーム』を実施。これはユネスコが提唱する持続可能な開発目標に関するゲームで、いかに持続可能な活動ができるかが結果に表れるものです。これを中学部の選択者が行ったところ、なんと指標としてある「経済」「環境」「社会」の3つがバランスよく高いポイントを出す、という結果になりました。

大人がやると「経済」の1つに大きく偏ることも多くあるのに、中学生たちは初めから積極的に対話し、周りのことをよく考えてゲームを進めることができ、ゲームの中で持続可能な世界を作ることができました。これはこどもの森の ESD の実践が子どもたちにしっかり伝わっている、という一つの証明になるのではないのでしょうか。

(佐野 純)

ESD 国際会議／海外視察報告

- ☐ 平和と持続可能性のためのユネスコウィーク
～カナダ・オタワでの国際会議
- ☐ 中国の教育を体感～個性的な教員の方々と～
- ☐ 韓国のユネスコスクール～地球市民教育～
- ☐ SDGs に向かうために、ESD が大きな役割を果たす！
～北京でのアジア太平洋専門会議～

平和と持続可能性のための ユネスコウィーク

高原 麗奈

ユネスコ国際フォーラムに参加して

2017年3月、カナダ・オタワで開かれた国連『平和と持続可能性のための UNESCO ウィーク』に、日本のユネスコスクールとして参加する機会をいただきました。この会議は、国連が提唱する ESD（持続可能な開発のための教育）と GCED（地球市民教育）フォーラムとして5日間にわたり開催されました。行政、NGO、ユース、教員などいろんな立場の方が参加し、内容も政策から教育現場レベルまでさまざまでした。会議は開催国・カナダの先住民を代表して、クラウドット・コマンドさんより、実りある会議になるようにと民族の伝統的な言葉での祈りをささげられ、スタートしました。

このような時間からも多様性を尊重するカナダや、国際会議の空気を感じました。プログラムは全体会と分科会で構成され、全体会では、グローバル・アクション・プログラム（GAP）が推進されてから中間年を迎えるため、ふり返りと今後の課題が共有されました。分科会は『学び変容する組織』『ESD のグローバル課題』などをテーマに、ワークショップなどが行われました。



世界のユネスコスクールと出会って

ユネスコスクール（ASPnet）の教員が世界から集って行われた分科会を紹介します。一つ目のユネスコが推進している気候変動プロジェクトについての分科会では、日本を含む15カ国からの参加がありました。気候変動の取り組みに向けて「学校を変容するためにできることは？」「学校を越えるイニシアチブとパートナーシップ」などのテーマについて意見を出し合いました。

今回の会議のはじまりに、カナダ政府より環境・気候変動大臣からの歓迎メッセージがあった際には、気候変動がその国の重要課題の一つとして、優先的に取り組まれている世界の状況を実感しました。この日のプログラム終了後にはASPnetの交流会が行われ、お互いの教育現場の様子に驚いたり、環境は違っても同じことに喜び悩んだりしていることがわかったりと、話が尽きない時間になりました。

二つ目の平和構築についての分科会では、「あなた自身は学校に変化をもたらす人かどうか？」「グローバル市民」を育むために何ができるのだろうか？」などをテーマにグループディスカッションが行われました。ここではそれぞれの学校の実践を共有する時間があり、こどもの森の取り組みやESD重点校・サステナブルスクールの活動について紹介をしました。これからのユネスコスクールの大切な活動として、ホールスクールでの実践、具体的なアクションプランの共有や国を越えた協働ということが提唱されていました。そうした活動のサポートとしてオンラインプラットフォームの紹介があり、世界各国の情報共有の場ができつつあることも、今後の広がる可能性を感じました。またファシリテーターをされたインターナショナルコーディネーターであるザビーネさんより「UNESCOはESDのためだけではなく、その先の平和を築くためにある」というメッセージも印象に残りました。

これからの学びに向けて

今回のフォーラムを通して環境や立場、活動内容は異なっても、「持続可能な社会には何が大切だろうか」「グローバル課題を解決するためにどんなことができるのだろうか」という想いのもとに、世界のいろんな場所で素敵な取り組みが行われていることを知りました。また、世界のさまざまな場所において、よりよい学びを模索しながら日々実践を重ねられている、ユネスコスクールの教員をはじめ多くの方との出会いで、大きな励みをいただいたように感じています。

会議では、持続可能な社会をつくるため教育を通して、共通言語として大切にされていたことが『Living Together（ともに生きる）』という言葉でした。これからの社会で大切なことは「立場や価値観がことなる人たちが、お互いを理解し尊重し、協力すること」「一緒に生きていくために平和をつくっていくこと」が強調されていたことも、今までの学びの在り方そのものに、大きな変容が問われていることを実感する機会になりました。

中国の教育を体感 ～個性的な教員の方々と～

佐野 純

中国という国家とその教育

国連大学のプログラムで ACCU(ユネスコアジア文化センター)がコーディネートをする中国政府日本教職員招へいプログラムに参加し、文部科学省職員・国連大学職員・その他の教職員の方々総勢 25 名で中国を訪れ、約 1 週間を過ごしました。北京や上海だけでなく安徽省合肥市という地方都市も訪れ、政府機関や学校、文化施設も見学し、中国の教育や文化を肌で感じ、子どもたちと接し、教職員と対話することができました。また、日本の文部科学省に当たる中国教育部を訪れ、大臣や役所の方々とお話し、大きな国家の教育を動かし発展させている現状を聞きました。日本よりも、国家のための教育という力強さを感じ、都市部を中心に急速に発展していることが伝わってきました。

初等教育を行きわたらせること、その水準を高めていくこと、ICT など活用してよりハイテクノロジーな教育を推進していくことに力を入れている一方で、「どのような教育が良い教育と考えているか」という質問に対しては「教員のトレーニングをしている」「徳の高い教師による教育が良いと考えている」というような、質問の意図が伝わりにくかった印象の答えや抽象的な答えが返ってきました。いかに勉学に取り組み、いかに(狭義の)学力を上げていくかに重点が置かれているような印象を受けました。

中国の発展と教育

今回のプログラムに参加したのは、中国という国を体感することが目標の一つでした。国家の存在、人口規模や歴史の違い、実際に行ってみるとそれをまざまざと感じることができました。



特に国の発展は目覚ましく、以前の中国を知っている、同行の教員の方々も驚くほど発展していると言っていました。それは地方都市を訪れた時も同じような印象でしたが、中心部を少し離れると未開発を感じさせる様子だった。この人口規模であればそのダイナミックさを活かした教育を作っていくしかないのだろうと感じました。

学校行事の様子も見学しましたが、そうした取り組みが積み重なった結果できたのだろうというエネルギーに溢れる活動が展開されていました。中国については、メディアが報道する様々な出来事から、あまり良い印象を持てずにいましたが、実際にその地で過ごし、現地の人と関わると、国の外から見ているのとは違い、とてもあたたかいものを感じることができました。

全国の教員の方々との交流 国の教員の方々との交流

プログラムに参加したことで、中国を知ることができただけでなく、北海道から四国まで広い範囲で教員の方々とのつながりができました。プログラム中もお話する機会があり、中国への留学経験がある方、中国での教員経験がある方もいて、深い知識と考察を含めたお話ができ、非常に多くのことを学びました。帰ってからの報告会には大阪府立渋谷高校の先生にもお越しいただき、共に報告をすることができました。

一人で学んだことだけでなく、現地で、日本で、対話して深めることで中国をより深く知り、相対化して日本のことを改めて捉え直すことができましたと思います。その後も定期的に連絡を取り合うことがあり、地理的に可能な範囲で集まる機会も自主的に設け、その後の情報交換も行っています。そのようなつながりも含めて、この体験を、子どもたちとの関わりの中で活かし、いずれ中国との交流を形あるものにしていくのがこれからの目標です。

韓国のユネスコスクール ～地球市民教育～

藤丸 浩志

学習者から作っていく、自発的な ESD に向けて

2017 年の 7 月 11 日～17 日の 1 週間、ユネスコ韓国委員会・国連大学・ユネスコアジア文化センターの主催する、日本教職員韓国訪問プログラムに参加しました。このプログラムは、韓国教育状況及び地球市民教育（GCED）と持続可能な開発のための教育（ESD）の理解、また、韓日教師間教授経験の共有及び韓日教職員ネットワークの強化、韓日両国の相互理解及び友好増進を目的とし、2005 年より毎年実施されています。主に、韓国の主要教育現場及び GCED と ESD の理解、学校及び教育機関訪問、教師・学生との交流活動及び懇談会、そして韓国文化理解及び家庭訪問、といった内容が組まれており、毎日充実した時間が準備されていました。

初日には早速、“韓国のユネスコスクール活動と持続可能な発展教育”と題した講義で、その数日後に訪れる忠清北道のチョンミョン学生教育院の院長ユ・チョルさんより、韓国の ASPnet の現況と活動、韓国の ESD の現況と推進方向の発表を伺いました。韓国の ESD 教育はまだまだ認知度が低く、研修会などでもっと広めていく必要があること、そういったことを現場レベルの、下から声をあげていくこと、そして問題解決型、体験型の ESD 教育施設の拡充、また、教師が中心ではない、学習者・参加者中心の生徒から作っていくような、自発的な ESD を推進していくというお話でした。

ソウル市にある安川小学校では、地球市民教育の実践に取り組んでいました。そこでは、「平和と人権」をテーマに進めており、学期が始まる前には、担当するグループの教員同士での研修や、また、保護者も一緒になって、これから学んでいくことを確認し考える時間が設けられています。さらに、地域にも学びの場への協力をお願いしていることなどから、教員と生徒だけの学習にこだわらず、保護者や地域の方を含めた広い範囲でお互いに学び合うことができる環境が整っていました。

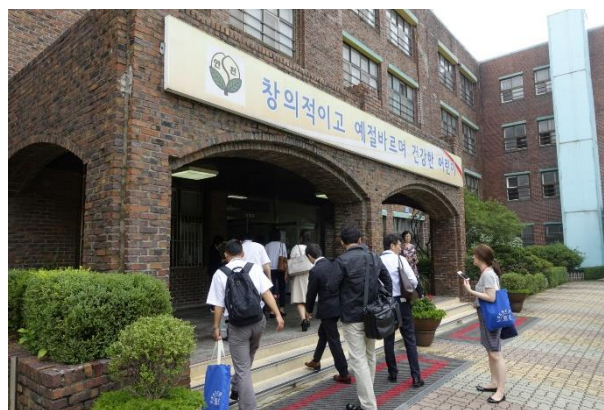
一緒に学び、深めていくことができる場所

ユネスコスクールとしての様々なクラブ活動は、子どもたち同士の活動はもちろん、教員同士、保護者同士でもクラブ活動があり、学校が子どもたちだけが過ごすところではなく、多世代が同じ空間でそれぞれの学びを深め合う場所になっているように感じました。他にも、専門の人が管理している、文具や教材、学習に必要な備品などがある整った学習準備室があり、学習に必要なものがすぐに準備でき、使える仕組みになっていました。また、各部屋の ICT の整備など、充実した環境が揃っていました。文化交流という時間に、小学3年生のクラスにはいらせてもらったときには、韓国の子どもたちに、箕面こどもの森学園の高学年クラスの人たちが草木染めをした風呂敷をプレゼントしました。

こどもたちの主体性を育む活動

忠清北道の陽青中学校では、子どもたちからの自主的なクラブ活動のことや、学習時間の中に興味や関心のあるテーマを導入した時間、時間割の変更、規則の変更などを、子どもたちからの声を反映して実施していることが多くあることなどから、子どもたちの主体性を育む活動に力を入れていることを強く感じました。また、子どもたちの作品がいたるところに展示され、どこでも目にふれることができ、世代間で刺激し合うことが自然とできるような環境も整えられていました。読書教育にも力を入れており、読書は自分の表現活動を広げるために役立つものとして、読書を習慣づけるよう、図書館とも協力していました。

同じ地域にある陽青高等学校でも、子どもたちが自発的にだしてきた特技・特色を活かした授業が多くあり、学校と地域社会がつながり、地域から学び、地域の力となる存在になる“未来型地域学校”を目指して活動をしていました。



SDGs に向かうために ESD が大きな役割を果たす

藤田 美保

SDGs を目指す教育として

第5回 ESD に関するアジア太平洋専門家会議及び第1回アジア太平洋国際コロキウムが2017年12月11日～14日の日程で北京（中国）にて開催され、ESD 重点校（サステナブルスクール）の管理職という立場で参加しました。このコンファレンスでは、世界全体で2030年に達成を目指しているSDGsに向かうために、ESD（持続可能な開発のための教育）が大きな役割を果たすことが認識され、そのために教育をどう改革していくのかがテーマでした。特に、SDGsの目標4「すべての人に包括的で公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する」の中の7つ目のターゲット「全ての学習者が、持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能を習得できるようにする」の内容をどう実現していくのかが話し合われました。

カンファレンスには、中国のESD研究者や実践者だけでなく、いろんな国からESDの専門家が参加していました。それぞれに共通していたことは、ESDが学習者中心の学びであるということでした。ただ単に知識を得る学びではなく、学習者のあり方（態度）を変え、行動を変容させていく学びがESDでは重視されます。批判的思考力や多角的な視点を育むことと価値観を問う教育実践を様々な教育方法を用いて行うことで、子どもたちは自分と社会のつながりについて知り、物事の意味決定に参加する機会を得ることができます。こうしたことが積み重なると、子どもたちは民主的な決定をしながら自分たちの行動を変容させていき、持続可能な社会の担い手となることができます。

学習者中心の学び

今回は、ESDの実践に力を入れている中学と高校の地理の学習を参観しました。中学の授業では、「山間部に加えて、なぜ平地で川のあるところが発達しやすいのか？」がテーマでした。教科書や資料集を使って学習はしていましたが、生徒たちが交代で教師役を務めていました。私が参観した時間も、担当の生徒が前でスライドや自分のノートを見せたりしながら、自分のまとめたことを発表していました。高校の授業では、実際に自分たちの学校がある地域のことを調べ、あったらいいと思う機能や施設などについて考え、この地域をどんなまちにしていきたいかというテーマを深めていました。



今回のカンファレンスで基調講演されていた、チャールズ・ホプキンス氏（カナダ：ヨーク大学）の講演内容の一部を紹介します。

「ESDの実践には、5つの段階があります。①何もしない ②イベント・クラブとして活動する ③ESDについて教える ④ESDのために教える ⑤ESDがコミュニティの課題解決に結びついている。④や⑤の段階の実践は、一人の教員のカや、一つの教科の枠の中だけでできるものではありません。すべての教科が横断的につながり、教員がお互いの強みを生かし、助け合ったり、影響し合ったりすることが大切です。ESDを実践することで、教育の目的と結果を問い直すこと、カリキュラム開発を促進すること、子どもたちが社会課題を解決するために思いやりの気持ち・知識・スキルを育むこと、学校が他団体や地域と連携すること、教えることと学ぶことの意義を問い直すことなどが可能になります。」

箕面こどもの森学園の実践報告もしました

ESDを実践していくためには、財政源や人材が確保され、組織全体で取り組むなど、包括的な戦略が必要です。持続可能な社会とは何かを問い続け、教育だけでなくいろんな分野で、持続可能な未来を創るために研修や教育が再構築されなければいけません。ESDに関する研究業績が増え、問題を深く理解するための批判的思考力が育まれ、読み書きとコミュニケーション能力が強化され、問題解決能力が向上するなどの教育が実践されれば、SDGsの4.7のターゲットの実現につながっていきます。

今回のカンファレンスでは、日本のESD重点校（サステナブルスクール）として、箕面こどもの森学園の実践報告をする機会がありました。子どもたちが毎週学習計画を立て、それに基づいて学習が行われること、学期ごとに大きな学習テーマ「気候変動」「平和のレシピ」「私の将来」などを決め、学校全体でそれを掘り下げる学びをしていること、全校集会で多数決を用いずに話し合いをして、学校のルールや行事のことを決めていることなどを発表しました。

発表後、いろんな国の方から、「とても興味深い内容で、参考になった」「ドイツにも、あなたの学校のような学校がいくもある」「子どもたちが民主的に意思決定しているのが素晴らしい」などというコメントをいただきました。

コラム 2

韓国の ESD 実践者との交流！



国際連合大学 日韓教員交流 韓国教職員招聘プログラムの一環で、韓国で ESD の実践をされているユネスコスクールの先生や、韓国の教育委員会、ユネスコ協会のみなさんが、訪問団の見学先として、箕面こどもの森学園が選ばれ、約 20 名の方が、学校見学に来られました！

見学当日は、歓迎の準備をしてきてくれた「ようこそチーム」の子どもたちが、日本語と韓国語で自己紹介や、日本の遊びとしてお手玉の紹介をしました。子どもたちの中には、お家でも一生懸命、韓国語の練習をした人もいたみたいで、その気持ちが伝わり、とても喜んでいただきました。続いて、記念品の交換。箕面こどもの森学園からは、草木染でつくったあづま袋をプレゼントさせていただきました。その後は、学校内を見学をしていただきました。

今回の視察では、日本のオルタナティブスクールは初めてとのことで、先生方はとても熱心で、たくさんのご質問をいただきました。「子どもたちが主体的に学ぶことができ、あたたかい家庭的な雰囲気のあるとてもすてきな学校ですね～」というようなご感想をたくさんいただきました。別の学校に見学に行かれた先生たちからも、「すてきな学校だったみたいですね～ 行きたかったです！」という言葉がたくさんいただくほどでした。ユネスコスクールに加盟していることで、こうして韓国の先生たちとも交流できて、とてもすてきな時間でした。

(藤田 美保)

箕面こどもの森学園の取り組みについて

大阪府立大学 人間社会システム科学研究／准教授

伊井 直比呂さん

聖心女子大学教授／聖心女子大学グローバル共生研究所副所長

ユネスコ／日本 ESD 賞国際審査委員

永田 佳之さん

自己の未来と、社会の未来を重ねている子どもの未来観

日本の教育の国際化。それは英語などの語学力の伸長のみを直接的にいうものではありません。また、国際政治経済の世界で行われているように、他国に対して優位に立とうとするパワー・ポリティクスに寄与する教育でもありません。教育の国際化は、例えば、ユネスコ憲章の前文から読み取れるように、「自国の利益のためだけの教育ではなく、世界や人類のための教育をしましょう」ということです。これを推進するのが UNESCO ASPnet（国内呼称：ユネスコスクール）です。そして、その学習活動一つが、SDGs に示されるように、公正と公平に基づく持続可能な社会や未来づくりの教育であり、誠実にグローバル・アクション・プログラム（GAP）に従って ESD を実践する教育などです。すなわち、箕面こどもの森学園が取り組んでおられるようなことです。もちろん、このような学習は ASPnet 加盟校に限らず、文部科学省はどの学校でも実践を推奨していますが、まだまだ広がっていない現実もあります。

さて、箕面こどもの森学園での実践は、国際的な潮流を捉えつつ、ESD の大きな特徴である、自己の未来と社会の未来を重ねている子どもの未来観をととても大切にしておられます。それゆえに、彼らの希望溢れる学習欲求（権利に基づく教育：GAP 原則）に基づき、子どもゆえの当事者意識を育てておられます。また、日常の学びと国際的な交流を通じた、世界の課題と身近な課題の同根性、および類似性に気づくようなアプローチは、家庭や学校から世界の課題の解決に通じることの意識を生み出します。やがて、児童生徒は（大人になってからも）論破の議論ではなく、学びあい、協働して問題解決に臨むことでしょう。数年後、10 年後、20 年後がとても楽しみです。

大阪府立大学 人間社会システム科学研究科 准教授

伊井 直比呂



地球規模課題に挑むグッド・プラクティス

日本には千校以上のユネスコスクールがあり、その使命としてESDに取り組むことが期待されてきました。本来、国連のユネスコが標榜する理念である平和や持続可能性の実現に学校全体で挑んでしかるべきですが、そこまで本格的な実践を展開しているユネスコスクールは決して多くないのが現状です。しかし、箕面こどもの森学園は地球規模課題に^{ホールスクール}学園全体でチャレンジしています。しかもその学びは形式ばらず、仲間と一緒に楽しく自然体で、深い。気候変動（地球温暖化）という深刻な事態についての学習でも、若い世代に希望をもたらししている良質な実践です。

世界中のESDの優良実践を「ユネスコ／日本ESD賞」の国際審査委員として見てきた筆者が強調したいのは、箕面こどもの森学園は、ユネスコがESDで大切だと強調している^{グッド・プラクティス}ホールスクールや協働的思考や創造的思考、批判的思考が実現されている立派な優良実践であるということです。そこには、これから地球規模課題に取り組もうとしている学校やNPO等の民間組織への大事なメッセージも見出せます。つまり、通例、気候変動などの地球規模課題を学ぶとき、グローバルや国家などのスケールの大きな話になりがちですが、箕面こどもの森学園で大切に育まれているのは「暮らし」や「暮らし方」であるということです。

ESDは、時にして、国連や国家主導であるという性格が批判されてきたこともありました。が、同学園は「持続可能な開発」のための「教育」というよりも「持続可能な暮らし」のための「学び」が基本となっている学園だと言えましょう。その意味で、「国連ESDの10年」後におけるESDの世界的な課題に見事に応えているのです。

聖心女子大学教授／聖心女子大学グローバル共生研究所副所長
ユネスコ／日本ESD賞国際審査委員
永田 佳之



コラム3

ユネスコ気候変動プロジェクト

～世界ビデオ会議～



2018年3月、ユネスコ本部からの提案を受け気候変動プロジェクトについてのビデオ会議に参加しました。このプロジェクトは、ホール・インスティテューション・アプローチ（WIA：機関包括型手法）と呼ばれる、学校全体で気候変動に取り組むユネスコの国際プロジェクトです。このプロジェクトには日本を含む25か国が参加し、日本からはこどもの森を含む10校が参加しています。そして今回の会議は、デンマーク・レバノン・日本、そしてユネスコ本部があるフランスと4ヶ所を結んで、3校の取り組みを報告する場となりました。

デンマークのRoskilde Gymnasiumからは、2017年にコペンハーゲンで行われたユース会議の様子、そしてレバノンとデンマークとで、気候変動の国際プロジェクトが進められていることが紹介されました。またSDGs dayを設け、全ての科目で地球課題について考えるなど、グローバル・シチズンシップを育む活動が発表されました。レバノンのDeutsche International Schule Beirutからは、生徒や教員を含む環境チームを中心に持続可能な学校づくりを進めていること、全校での気候変動学習、リサイクル資材活用、子どもたちが参加する地域活動など、WIA4つの重点分野の（学校運営・教室内外の学び・設備と環境・地域との連携）取り組みが紹介されました。

こどもの森からは全校で取り組んだ気候変動学習と、クラスごとに学びの目標や実践内容を変えて取り組んだ様子などをお伝えしました。また環境団体との連携、子どもたちが話し合って決めたアクションプランや、子どもたちの変化などの報告を行いました。

その後の質問の時間では、デンマークやレバノンの学校からこどもの森に、「地域コミュニティからどのようなサポートがあるのか」「子どもたちのモチベーションはどのように生まれるのか」「ワークショップはどのように行われたのか」などの質問があり、学園の取り組みについて関心を寄せていただきました。

その国をとりまく環境や学校の様子は異なっているけど、日々学校で工夫していることや大変なこと、楽しいことなど国境を超えて共感できることが多くありました。同じゴールを目指しながら、世界各地で積み重ねられている実践が、このような交流を通して共有されることで、これからの変化につながっていくことを感じる時間となりました。（高原 麗奈）

15 年度～17 年度

3 年間のテーマ&ワールドオリエンテーション一覧(2015～2017)

	1 学期	2 学期	3 学期
15 年度	日本を紹介しよう (市民/平和)	食のこと (市民/平和/環境)	防災 (市民/平和)
16 年度	100 年続く庭づくり (環境/平和)	差別と貧困 (人権/平和/市民)	メディアリテラシー (市民/人権)
17 年度	気候変動 (環境/平和)	平和のレシピ (人権/平和/市民)	わたしの将来 (市民)



発行日：2018 年 6 月 15 日

発行者：認定 NPO 法人 箕面こどもの森学園

問い合わせ先

認定 NPO 法人 箕面こどもの森学園

〒562-0032 大阪府箕面市小野原西 6-15-31 TEL：072-735-7676

メール:kodomomori@nifty.com HP: <http://kodomono-mori.com>

